

I—26 各国の城の構造美観について

(株) 北日本ソイル研究所 正員 中村作太郎

1. まえがき

^{1),2)}
世界各国の城はその地域環境により構造材料も違ひ、構築工法も異なるほか、それぞれの国情や政治的背景の相違等によつて、その国々の持つ特有の地域環境の構造美観が構成される。

各国の城をつぶさに観察すると、その民族事情・史的変遷・地形環境・気象情况等に適合した構造美観の城が造られており、技術美としては、力学的安定美が基本となつて形成されることが考えられる。

以下、城の起源と史的変遷、各国の城とその構造美観について、考察等につき論述する。

2. 城の起源と史的変遷 ^{1)~6)}

人類のはじまりは数百万年以上も前のことで、身近にあつた自然の石や木を使つて外敵の襲撃を防いだのが原始的城のはじまりであると考えられる。

原始時代の人類は小グループで群居し、木のかげや洞穴に一時的の住いを求め、食物を探し回つて放浪したと思われる。この時代には天変地異の危険のほかに、猛獣や凶暴な人達のグループの襲撃に常にさらされていたのである。この襲撃に備へ、自分達の住いを木をたて、石を積むことによつて守る着想が原始的築城法のはじめであつたと考えられる。その年代は約数十万年前と推定されるが、城のはじめて造られたのが中央アジアであるか、アフリカであるか明らかではない。

これらの原始的防護物の構造法は、人類の放浪生活中にはあまり発達せず、現在残っているような城郭の形体の造られるようになったのはかなり後世のことである。城は人類の安全と平和を願う心の現われであり、集落を防備して生命・住居・財産・食糧等を安全に守り、集団の秩序を他の部族に破壊されないように造られたものである。しかし農耕時代の経済社会には貧富の差が生じ、特権階級の住居には防備を施したものが現われ、王侯貴族の権力者達が大きな住居を構えるようになった。

紀元前四千年から二千年の頃栄えた人類の四つの古代文明圏には、メソポタミヤ、エジプト、インド、中国をあげることが出来るが、これらに所属する都市はすべて城郭都市となり、他の城郭都市への襲撃の基地となつたのである。すなわち、この時代より城には戦闘の拠点・基地としての攻撃的性格が生じて来たと考えることが出来る。

古代構造物築造に、石積み技術がエジプト周辺において非常に発達したのは、ピラミツド^{3),4)}の建造に負うところきわめて大きいと考えられる。古代・原始時代に造られたと思われる永久構造物としての城は現存していないが、石積み構造としてのピラミツドやアーチ構造物が現存している実状からみて、仮設のものは多少造られたものと思う。

エジプトのような沙漠地帯では、安定した住居が得られず、放浪生活の連続であつたから、永久的な城は必要でなく、むしろ王侯貴族の遺体を安置する宗教的構造物のピラミツドの重要性が認められたものと思う。ピラミツドはまた王侯貴族の墓として死後の世界に君臨する厳然たる神秘的構造物として外敵を威圧したのと考えられる。ピラミツドはまた古代における集団の財宝・穀物等の貯蔵倉庫としても使用されたから、城の最も初期的な守備だけの原形であるといえると思う。スフィンクス建造もピラミツドと並行して行なわれているが、これは攻撃的姿勢を示したもので、外敵に対し脅威を与えるものである。

世界各国に共通した城の定義は作られていないが、各種の事典・図書等を調べてみると、城あるいは城郭というのは、一般には敵を防ぐために造つた軍事的構築物を意味し、最初は単なる防護的なものから時代とともに戦闘目的にも用いられ、更に国王・領主等の支配者の居住、権勢表示、領内統

治などをも兼ねるものへと変遷している。すなわち、狭義の城は割合簡単に定義出来るが、本質的な広義の城の定義はかなり難しく、原点にさかのぼって検討しなければならない。

3. 各国の城とその構造美観について^{1)~8)}

世界各国に築造された城は、その歴史的背景により、古代の美、中世の美、近代および現代の美のいずれかにより特色づけられる。ヨーロッパ、中近東、東南アジア、中国、日本、アメリカ、カナダ等の各国において、その地理的条件、気象状況、民族性と国情等の違いにより、独特の構造美観が自然に創造されている。

(1) ヨーロッパ諸国の城

イギリスのロンドン塔はロンドンの著名な塔となつているが、軍事的基地、歴代の王の居城として用いられ、城塞としてイギリスの歴史を背負っているから、その雄々しくそそり立つ美観には、一種独特の男らしさがある。イタリアにはローマ帝国繁栄の時代と中世期の権力の表徴として沢山の城が造られたが、ローマを流れるテベレ川の右岸にそびえる大円塔のサンタ・アンジエロ城は、古代より伝わる石造の大建造物としての壮観な構造美を誇っている。フランスのシヨウモン城は、ロワール川の中ほどプロワの町より10kmほど下流にあり、中世風でありながら繊細で女性的な美観を示しているのは大変面白い。

また西ドイツの文化は、ライン川のほとりに開花して沢山の城が造られたが、その中でもハイデルベルクの城はライン川の支流のネカール川に沿って造られ、ロマンテックな古城としての構造美を示している。ギリシャの城としては、アテネのアクロポリス、ミケネのアクロポリス、リンドスのアクロポリス、アクロコリント等があり、いずれも大城塞として町の防備として造られ、古代文化を表徴する独特の歴史的構造美観を誇っている。スペインのマンサナレス・エル・レアルの城は、イベリア半島の特異な風土の影響を受けて、強力な太陽に輝く明暗のくつきりした独特の構造美を示している。スイスの城は、自然環境の良さに恵まれ、山岳地帯に調和した景観的構造美の優れたものが多く、サルガン、シユピツク、オベルホーヘン、シヨンの城等が著名である。

(2) ソビエトの城

ソビエトの城は、モスクワ、レニングラードを中心に政治と関連して造られている。

ソビエトの城で著名なものは、モスクワのクレムリン城、レニングラードの冬宮等をあげることが出来るが、クレムリン城は14世紀に築城され、赤の広場の隣りに雪景色に映えながらその冷厳美をただよわせているし、冬宮は「冬の離宮」といわれ、薄氷の張るネバ川に面し薄緑色の不気味ではあるが、安定した姿で静かに立っている。

(3) インドの城

インドの城には、英国の支配前のものが多く、歴史の変遷を物語っている。

東南アジアの文化発祥地とみられるインドには、17世紀半ばに英国の支配前に造られた赤色石造りのデリー城があり、特異の幻想美をただよわせているほか、アグラ城、アンパール城等がインドにおける中世の王都をしのばせ、歴史的流れをロマンテックに物語っている。

(4) 中国の城

中国の城はヨーロッパ諸国の城とは趣を異にし、城壁、城郭に徹している。

中国は東洋における大国であり、古くから外敵、内敵を防ぐための城壁が沢山造られている。北京の故宮(紫禁城)は1404年頃造られた政治上の城であり、中国独特の建築様式を用い、東洋的な構造美観をほしいままに実現しているし、14世紀に造られた西安城も中国建築美を誇る独特の城であり、その優美さにはうつとりとさせられる。

また巨大な塊構造物として有名な「万里の長城」は、紀元1500年頃に完成し、延々と全長 6400 km

にもおよび、中国人の夢を実現した巨大の空間構造美を誇るロマンテックな城郭である。

(5) 日本の城

日本の城は長い間の武家政治と関連が深く、中国やヨーロッパのものとは異質の発達を遂げている。

東洋の列島である日本の国には、内敵を防ぐための城が沢山造られ、数えきれないほど現存している。武家政治の長かつた時代の影響もあつて、各藩主の威厳を示すためにも競つて大きな城が築造されたのである。城の本体である石積構造の城壁の上に、木構造の天主閣その他が築造され、全体としての美観が保たれている。現在残っている城の数は約240ほどあるが、詳細は次のとおりである。

城の遺跡をも含め、北海道に3、東北に24、関東に38、東海に28、甲信越に20、北陸に14、近畿に40、中国に21、四国に16、九州に33、沖縄に2箇所の城が残っている。築造は紀元後700年～800年代のものは古い方で、1900年代に復元、改築されたものもかなりあるが、その大部分は1200年～1600年代に築城されている。数多い城の中で、姫路城、松本城、彦根城、名古屋城、大阪城、和歌山城、熊本城、会津若松城、弘前城等は、それぞれ特有の構造美を示しているが、いずれも歴史的背景と地理的環境の調和をみた景観美の上で優れた名城であると思う。

(6) アメリカの城

アメリカには、他の国々のような古い歴史、古い城郭がない。

アメリカの歴史は浅く、建国200年の間に大自然の開拓の仕事に追われ、ヨーロッパにおけるような古い伝統ある華麗な城を造る余裕もなかつたし、またその必要もなかつたのである。城としては、タイコンデロガ砦がその唯一のものであり、非常に戦闘的で厳肅な冷寒美をただよわせている。

(7) カナダの城

カナダにもアメリカ同様古い城はなく、現在あるのは近代のものである。

カナダの城には有名なヘンリー砦があり、オモチヤの兵隊そつくりの衛兵が立っている。1812年の米英戦争がきっかけで、この砦は1832年から造られたもので、ロマンテックな美観など全く感じられない近代的要塞といえる。遠くから眺めると、ロボツ的な機械配列美のようなものが感じさせられる。

次に、各国の著名な城の写真についてその構造美を鑑賞する。

Fig. 1 はエジプトのギザにあるカフラーのピラミッドであり、王侯貴族の墓として造られたピラミッドの代表的タイプである。城郭として造られたものでももちろんないが、石積構造の元祖としてその力学的安定美を誇っている。

Fig. 2 はギリシヤのアテネにあるアクロポリスの神殿であるが、そのはじめは町の防備の城塞として造られたものであり、ギリシヤ周辺にある神殿の代表的タイプである。その城址の美観には一種独特のものがあり、古代文化の歴史的美ともいえると思う。

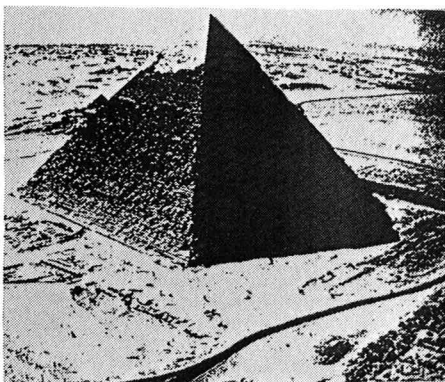


Fig. 1 エジプトのピラミッド

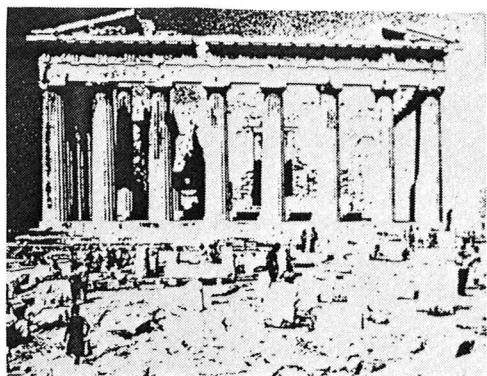


Fig. 2 ギリシヤ、アテネのアクロポリス

Fig. 3 はフランスのパリにあるベルサイユ宮殿であり、その整然たる厳肅な美観が群を抜き、フランス国の歴史的繁栄の跡が思い出される。また、Fig. 4 はやはりフランスの有名なシノン城であり、中世風の簡素な美観が目立っている。

Fig. 5 はスペインのセゴビアにあるイサベラ女王の居城として用いられたセゴビア城で、町を流れる二つの川の合流点の断がいの上に立っている。古代の石造構造の美しさが強力な太陽の光りに浮きぼりにされている。

Fig. 6 はスイスの有名なシヨン城であり、レマン湖のほとりの良い環境に助け込んだ優美さが目立っている。

Fig. 7 はインドのデリー城であり、東南アジアの文化裕祥地に相応しく、ロマンテックな幻想美が底にただよっている。Fig. 8は中国の歴史上有名な西安城であり、遠く中近東まで「クムダンの城」として聞え伝っている。西安は周から唐まで / / の王朝の都した昔の長安で、西安城(長安城)とは城壁に囲まれた市街全体のことを意味し、中国の歴史を物語る城壁都市である。

この城は一見中国建築の優美さを示しているが、「赤いトリデ」としての苦い思い出と長い歴史の流れれから来るロマンテックな思い出との二面がある。

Fig. 9 は中国の八達嶺にある万里の長城で、その威容は

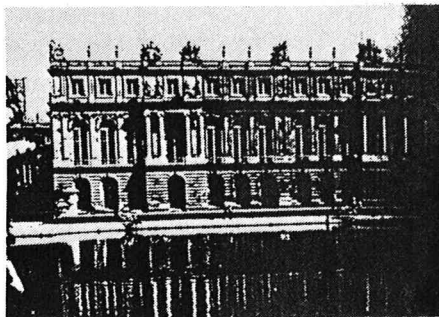


Fig. 3 フランス、パリのベルサイユ宮殿

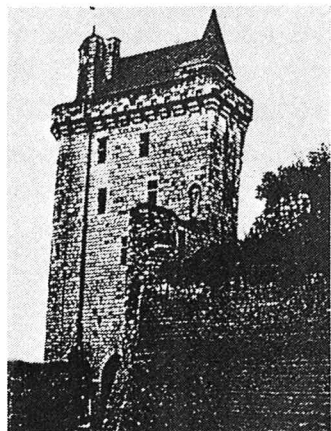


Fig. 4 フランスのシノン城

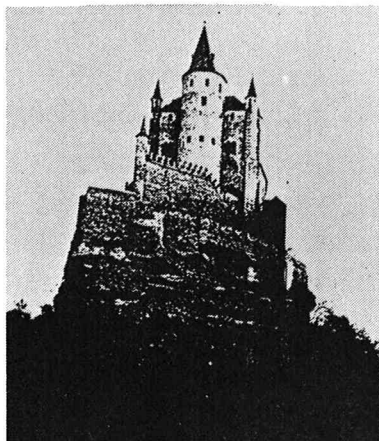


Fig. 5 スペインのセゴビア城

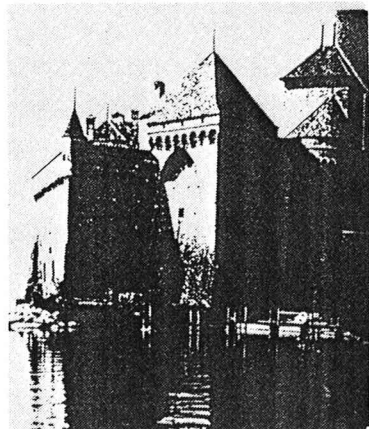


Fig. 6 スイスのシヨン城

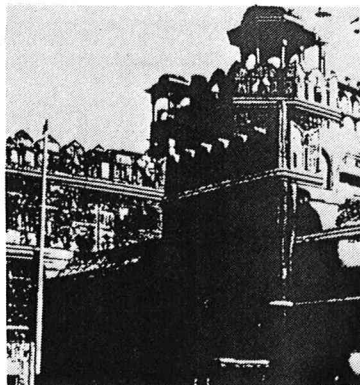


Fig. 7 インドのデリー城



Fig. 8 中国の西安城

立体感のあふれる中国古典美の表徴ともいえ、東洋における唯一のロマンテックな城郭構造物である。

約5400kmにおよび延々と続く城壁は、中国人の徹底した防衛思想の象徴であるといえよう。

Fig. 10 は我国の弘前城であり、規模は小さいが周囲の環境に調和した優美な城である。桜の季節には花に埋もれた白亜の天主閣が岩木山を背景に映えとても美しい。

Fig. 11 は我国の名古屋城で、雄大、華麗な近代城郭といえると思う。

Fig. 12 は日本の城の中で、巨石を用いたことで著名な大阪城である。

その精妙、豪華を極めた高大な大城郭の美観は我国独特のものであり、世界城郭史上にも輝くものと思う。

Fig. 13 は日本の城の中で、景観美の抜群として定評のある姫路城である。

Fig. 14 はアメリカのタイコンデロガ砦であり、実戦的武骨な砦は戦鬪の静寂美を湖畔に呼びかけている感じである。

Fig. 15 はカナダのキングストンにあるヘンリー砦であり、オモチヤの兵隊そつくりの

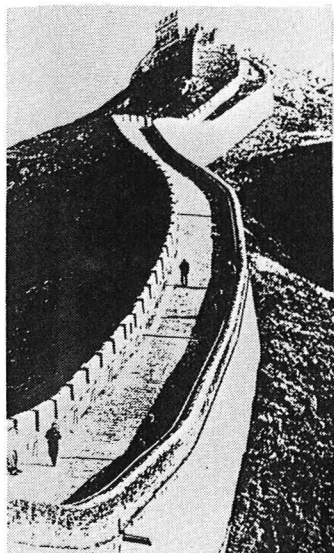


Fig. 9 中国の万里の長城

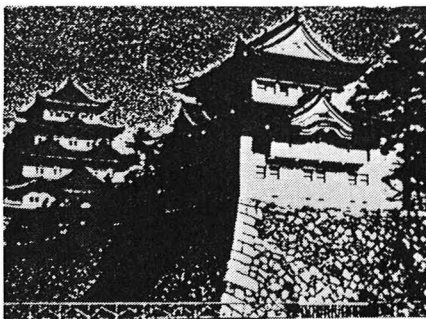


Fig. 11 日本の名古屋城

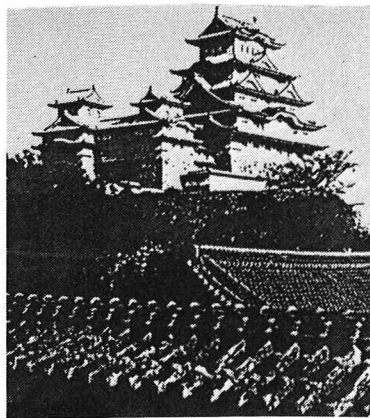


Fig. 13 日本の姫路城

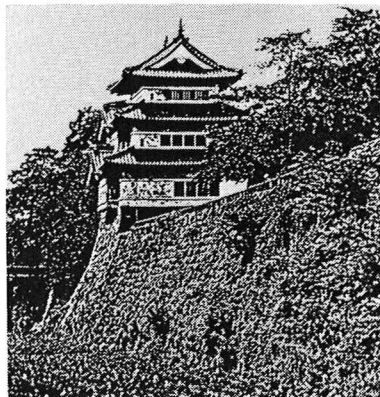


Fig. 10 日本の弘前城

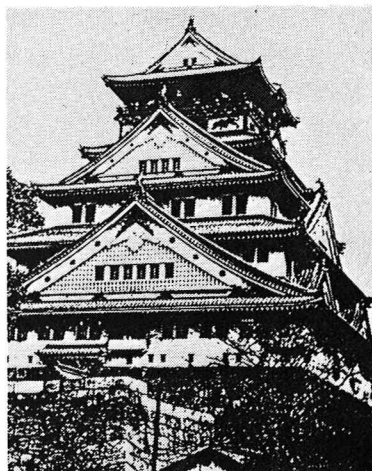


Fig. 12 日本の大阪城

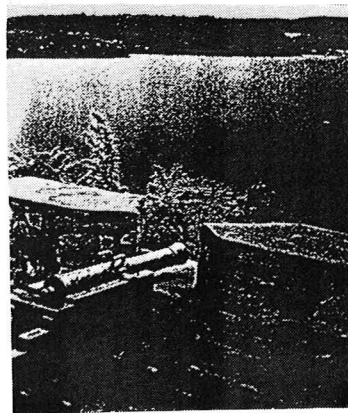


Fig. 14 アメリカのタイコンデロガ砦

衛兵が立っているあたり、むだのない近代的要塞そのものであり、現実としての機械配列美を背筋に一瞬寒々と感 ずる。

4. 考 察⁴⁾

ヨーロッパ、中近東、東南アジア、ソビエト、中国、日本、アメリカ、カナダ、メキシコ等の国々に造られたそれぞれの城には、その史の変遷、民族事情、気象状況、地形環境等により、おのおの異なつたふんいきの構造美観が感じられる。

城の築造は、土木工学的見地よりすれば、エジプト文化のピラミッド建造と間接的に関連があり、力学的安定美がその基本をなしている。

イギリスの城の偉風堂々たる男性美、フランスの城の女性的繊細美、西ドイツの城のロマンテックな情景美、イタリアやギリシャの城の古風な石造り構造美、スペインの城の特異な風土美、スイスの城の自然環境美、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーの城の北欧特有の史的建築美、ソビエトの城のロシア・パロツク風の建築美、インドの城の赤色石造りの幻想美、中国の城の大陸的巨大城郭美と芸術的東洋建築美、日本の城の巨石積み城壁の安定美と天主閣等の特殊木造建築美、トルコの城の史的、地理的環境美、アメリカやカナダの城の非ロマンテックな戦闘的機械配列美などが強く印象づけられる。

また、中国の万里の長城は、東洋における城壁構造物としての中国人の古来よりの夢を実現した一大傑作であろうし、エジプトのピラミッドは、人類の文化発祥地である中近東地方で造られた神秘的な宗教構造物であり、部落や集団の生活を永遠に守る平和願望の神殿とも考えられる。この点ギリシャのアクロポリス等と一脉通ずるものがある。

人類の歴史を調べ、城の起源を追求することこそ、土木工学の本流を探るために大変重要である。

5. あとがき

城とは、世界中の各民族、国々において、あらゆる環境を取り入れたその地方の代表的な平和願望の外敵防御の構造物で、時代の流れを表徴出来る人類文化史上の偉大な傑作建造物であり、力学的美観の巨大なかたまりともいえると思う。

なお、本論文をまとめるに当り、下記文献に負うところきわめて大きく、それぞれの著者に深謝するとともに、歴史上の見解の点では、上智大学教授岡利郎氏(政治史専攻)のご助言を頂いたことに對し、心から感謝するものである。

文 献

- 1) 北海道新聞社編：世界の城，北海道新聞社（1980）。
- 2) 井上宗和：ヨーロッパ古城物語，（株）グラフィック社（1984）。
- 3) 井上宗和：日本の城の基礎知識，雄山閣出版（株）（1978）。
- 4) 中村作太郎：各国の城の地域環境的美観論，土木学会昭和60年度講演概要集I-464（1985）。
- 5) 吉村作治監修：ザ・ピラミッド，日本テレビ放送網（株）（1982）。
- 6) 吉村作治監修：ピラミッド・謎と科学，日本テレビ放送網（株）（1985）。
- 7) 南条範夫監修：日本の城事典，（株）三省堂（1984）。
- 8) 鳥羽正雄監修：日本名城100選，（株）秋田書店（1984）。

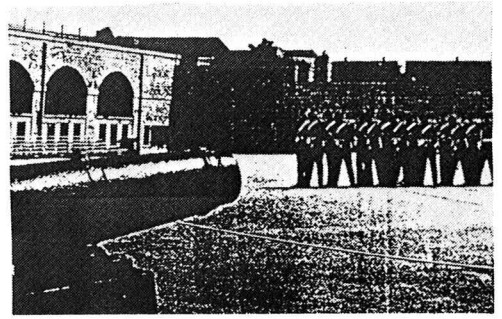


Fig. 15 カナダのヘンリー砦